

京都大学 総合人間学部 広報

特集 ご退任を迎えられる先生方から

退任のご挨拶	四日谷敬子	2
退任に寄せて	丹羽 隆昭	3
つれづれ思い出すままに	木村 崇	4
退職に当たって — 学生時代をふり返る	湯山 哲守	5
退任のことば	小川 侃	7
退任のご挨拶	足立 幸男	8
求めずして見つけたこと	ノイマン, ベルント	9

新任教員から

新任のご挨拶	永田 素彦	10
転 機	神崎 素樹	11
Research overview	ピーターソン, マーク	12
新任のご挨拶	中嶋 節子	13
史料解読と現地調査—中国史研究のおもしろさ	辻 正博	14
宇宙で一番、宇宙初	木下 俊哉	15
新任のご挨拶	金丸 敏幸	16
モラトリアムという経験	小原 丈明	17
自己紹介	川北 篤	18
新任のご挨拶	福塚 友和	19

特集 ご退任を迎えられる先生方から

退任のご挨拶

四日谷 敬子（人間科学系）



思い起こしますと、15年前の春に、私が新設の福井医科大学より京都大学の総合人間学部に着任致しましたときは、大抵の先生方よりも年を取ってから着任でして、前任校が一般教育の専任がほんの12名、ほとんど一科目をたった一人で担当するというような小規模な単科大学でしたので、何よりもまず部会にしましても、講座にしましても、さらには教授会にしましても、構成員教員の圧倒的な数にびっくり致しました。そして長い栄えある伝統のなかでの立ち居振舞い、しきたりを身につけるのに相当の時間を要し、大学の仕組みや動き、いろいろな文書提出のサイクルがようやくと分かってきたというところで退任ということになりました。その間まだまだ大学の改革は続きましたが、いつも整然とどんな困難をも乗り切っていくこの大きな組織に心からの敬意を覚えました。お蔭様で、学問研究に対する大学のとても自由な雰囲気によって、しなければならない研究、したい研究を（海外渡航も含めて）思う存分させて戴くことができました。自分の担当科目という制約のために、常々講義する機会がなかった研究テーマもありますが、そんなテーマの一つ、17世紀フランスのマルブランシュについて、アリストテレス、スコラとの関連で、特別最終講義をさせて戴けたのも大変有難いです。マルブランシュは、私が文学研究科に入学して最初に聴講した辻村公一先生の「近世西洋哲学史」で知ることになり、訳本もなく、ドイツ留学から帰国して就職もない頃に、30代になって独学で学んだおぼつかないフランス語の知識で読んだ哲学者の一人なのですが、デカルト以来の近代科学精神

と狂信的ともいえるキリスト教信仰が結びついた、私にとっては世にも不思議な思想家で、今に至るまで忘れられないひとでした。こんな風に書いておきますと、昔の文学部の古い建物の紙とインクが染みついたような臭いまで懐かしくしてきます。そしてともに学んだ友人達……。

こうして〈何もかも目出度し目出度し〉と思っている矢先、最後の最後になって、つまり退任の三ヶ月前に、建物の耐震強度工事のために、大文字山つきの15年間住み慣れた我が研究室を追われ、引っ越さなければならないことになりました。「大変なことになった」とドイツの友人にそのことを告げますと、「たしかにそれは腹立たしいことだけれど、これまで耐震強度の不確かな建物に貴女を入れておいたというほうがもっと腹立たしいことよ！」とドイツ人らしい答えが返ってきました。たしかに着任して二年目の冬でしたか、阪神淡路大震災を経験し、研究室の隅にはひびが入っていたのです。あの日には丁度全学共通科目の試験がある日で、しかし大地震のためJRは全面ストップ、大学に行こうにも行けず、本当に悲しい思いをしました。二年前のとても早くやってきた冬も思い出されます。12月半ばから、北陸だけでなく京都でも大雪となり、列車は遅れるし、タクシーもないしで、授業に30分は遅れてやっとの思いで辿り着いたということがありましたが、このとき何と学生さん達は待っていて下さったのです。このときばかりはくさすがに京都大学の学生さん！〉と感激しました。

これからは、母の遺した庭のガーデニングなどを楽しみながら、のんびりと暮らしていきたいと存じます。

去るに当たりまして、皆様様のこれまでのご厚情に心より感謝致しますとともに、皆様様の御健勝、御発展をお祈り申し上げます。

（しかや たかこ）

退任に寄せて

丹羽 隆昭（人間科学系）



今、十七年のご奉公を終えて大学を去るに当たり、その印象を述べるとすれば、一にも二にも、とにかく忙しかった、ということに尽きる。研究や教育で忙しかったのであれば大学教員として当然な

のだが、忙しさの大半は研究でも教育でもない第三の要素、「雑用」に起因したものである。何かが狂っていると言わざるを得ない。

この十七年は、二度にわたる部局の改組と、院、学部、全共の三部門すべてにおいて幾たびにも及んだ抜本的カリキュラム改革、それに通年制から半期制への学年暦そのものの転換までが加わり、まさしく激動の歳月であった。こうした激動期が幕を開ける直前に、私は四十代半ばを過ぎた身で転任して来たわけだが、それは前任校での先が見えぬ闇の中、停滞した研究を進めるため少しでも時間が欲しかったからである。教養科目のみ五コマ教えればよいという旧教養部の存在が当時の私にはこのうえない魅力と映ったのだが、それは赴任後ほどなくして幻影だったことが判明し、そういう甘い考えのツケはその後長く、重くのしかかることになったのである。

赴任後半年、まだ自分の身を置く研究室すらなかった時点で、先輩教授から呼び出しを受け、全学の要請だからと、「英語教育改善案」を至急作成せよと言われ渡されて、当時話題を集めていた東大の「英語I」を睨んだ青写真作りに取りかかった。この案は時間がかかった割に支持も得られず頓挫するに至ったが、今思えばこれこそ、時間と労力の浪費と挫折の蓄積という、私の雑用キャリアの幕開けを告げ、かつそれを象徴するものでもあった。それ以後ほとんど切れ目なく、ひとつ終わればまたひとつと、まさに盛岡名物「わんこ蕎

麦」のごとく、次から次へと厄介な仕事が投げ込まれることになってしまった。投げ込まれるひと玉の蕎麦にはいくつもの別の玉が絡みついて来ることも多く、総体的には実に大量の蕎麦を食べた計算になる。幸い蕎麦アレルギーは発症せず、絶えず消化不良ではあったが、それで死なずにすんだのは、ひとえに一部の先生方や部局の担当事務職員の方々のご協力と熱意のお陰である。

それにしても、激動期だったから仕方ない面もあったとはいえ、今でも腹立たしく思えるのは、委託を受けて問題を検討していると、途中で向こうが勝手に前提条件を覆してしまう事態が実にひんぱんに発生したことである。ほとんどまともな権限すら持たず、巨大組織の末端で働く弱小部局の人間は、激動の時代にあっては尚更のこと、いのように扱われてしまう。部局として本当に危うい場面、難しい場面の連続ではあったが、綱渡りの戦術を駆使して、最終的には何とか相手のいいようにはさせず、当部局の立場を守り抜けたと思っている。

今こうして私が言及しているのが何のことかお分かりになる方はもうあまりおられまい。「機構」誕生前の、しかも大学執行部が半期制導入実施を突然検討し始めた頃の話だと言えば、あるいは推測して頂けるかもしれない。しかし当時の時計台での「戦闘」に連日加わった人々は、敵であれ味方であれ、すでに多くが学外に去っている。今新たに去るべきは他ならぬ私となった。

人環・総人・機構をめぐる現在の環境は当時から見ればまさに長足の進歩を経たと言える。老兵の疲れた目には、しかし、かつて必死で防衛に当たった部局が、手の届かぬ何物かに変質してしまったように映らぬでもない。とまれ、その益々の発展を祈りつつ、私はこれから楽しく研究に勤しもうと思う。研究するには大学を去らねばならない。これが十七年の勤めから私の得た結論である。

(にわ たかあき)

つれづれ思い出すままに

木村 崇（文化環境学系）



京大教養部への着任は元号が改まった年だった。前任校での最後の年を迎えた頃、母はかろうじてレスピレーターに「生かされている」状態だったが、昭和天皇崩御の知らせを聞いたときは、おも

わず「よかったね、あの人より長生きできて」と言ってしまった。もちろん無反応だったけれど…

母は戦争未亡人と呼ばれるのがいやだったが、私が不良になるのを案じて再婚しようとはしなかった。世界中を旅するのが好きだった彼女は、最後は夫が戦死したフィリピン訪問で締めくくりたいと言っていた。京大へ移ってから19年、いよいよ退職を迎える今年の正月休みに、私は妻と「ルソン島のサラクサク峠」という地名をたよりに、車と案内人を雇ってその峠のある北部山岳地帯へ向かった。道を訊ねても現地の人はその地名を知らず、米軍とフィリピン軍が山下将軍麾下の日本軍を最後に撃ち破った記念の場所へ着いたときは、もう落日がせまり、小雨模様になっていた。父が米軍の砲弾に吹き飛ばされたのは、そこからまだ徒歩でかなり登ったところのようだった。マニラから400キロはある僻地である。9時間近くかけて飛ばしてきたのだったが、大小の町が次々と現れ、人家や田畑を見はるかすことができた。山岳地帯に入っても、棚田があちこちに作られていた。戦争で死んだ人の数は、現地の住民の方が両軍の戦死者よりもはるかに多かったというのはうなずけた。母はそれを知らなかっただろうが、むしろそれでよかったと思う。

教養部長から直々に辞令をいただいた日は、母の葬式から1週間もたっていないかった。桜はもう散り始めていた。私は名古屋から単身赴任で京都へ来た。これ以上迷惑をかけまいと気遣って逝ってくれたような気がした。

当時日本や西側諸国では、ゴルバチョフ人気がピークに達していた。おかげで2年目は初修外国語にロシア語を選ぶ学生が爆発的に増えて、私の担当クラスも100名近くになった。ロシア語教育にとっては、宇宙飛行士ガガーリンブーム以来の椿事だった。前年の教室は使えないので、大きな教室に変更してもらった。ところが開講直前になって、名古屋の自宅にいた私に教養部長から電話がかかってきた。ヘルメットとゲバ棒で「武装」し徒党を組んで教養部キャンパスを闊歩していた連中が、常駐していた建物が焼失したため、私が使うことになっていた教室を占拠したというのである。そこですまないが再度教室を変更してくれないだろうか、という電話であった。私は、「それでは筋が通らない」と渋った。「少なくとも私の授業の時は、教室を明け渡してくれなくては困る」と伝えた。すると意外にも、部長は何かひらめいたのか、わりと明るい声で「では、その線で行ってみましょう」とおっしゃった。

私が教室へ入る前に、「武装集団」は無言で隣の教室に移る。それが、週2回づつ繰り返された。どうやら双方にとって、この「定期的明け渡し」は「不法占拠」という口実を与えないための奇策だったようだ。つまり私は体よく利用されたのである。

さらに1年たつと、ソ連は崩壊し、ソ連を構成していた15の共和国もすっかりバラバラになってしまった。するとまるで踵をそろえるようにして、ロシア語受講生は潮が引くように減った。日本だけではなく、ヨーロッパでもアメリカでも同じ現象が起きた。あちらでは大学からロシア語教育が消え、ロシア関係の講座や科目がどんどん閉鎖されていった。ロシアにかかわる専門分野でせっかく育った若手研究者は行き所を失ってしまった。こうして無事定年を迎えられることが、じつは心苦しい。私が去るからといって、彼らにチャンスは巡ってきそうにないのだから。

（きむら たかし）

退職に当たって — 学生時代をふり返る

湯山 哲守（自然科学系）



「死んだ人々は還ってこない以上、生き残った人々は、何が判ればいゝ？

死んだ人々には、概く術もない以上、生き残った人々は、誰のこと、何を、慨いたらいい？

死んだ人々は、もはや黙っていらぬ以上、生き残った人々は、沈黙すべきなのか？」

『きけわだつみの声』という日本戦没学生の手記の発刊に寄せて、東大教授渡辺一夫が自ら訳したフランスの詩人ジャン・タルジュの短詩を添えていました。

私たちの世代は多かれ少なかれ、この短詩に心をかき乱され、ある人は空しく、ある人は昂然とそしてある人は迷いながら親の世代が行った戦争というものと向き合ってきました。それにしても「被害者」として「戦争を総括」していた期間が長く続きました。私自身も「朝鮮からの引き揚げ者」として繰り返し母親から「帰還の大変さ」を聞かされました。全学連の「再び侵略のための銃をとらない」、日教組の「教え子を再び戦場に送らない」というスローガンは、「広島長崎を繰り返させない」というスローガンとともに1980年代までは「戦争被害を繰り返させない」という枠組にはめられていました。

話は変わりますが、現在、京大に警官が入構するとき、現金輸送に随伴するにせよ、学内における刑事犯罪捜査にせよ、京都大学としてきちんと立ち会っていると思います。つい最近までは同学会（全学自治会）、学部自治会の代表も付きそうルールがあったはずです。私が3回生の時（1966年）に発生した「警官学内侵入事件」に対して同学会が「授業放棄」（ピケットなどは張らずに行

うストライキ）をした上で、学生部長交渉を行った結果、大学当局が「大学自治の慣行によって、警察官の立ち入りは大学の立ち会いの下に行われる」との確認を行いました。爾来上記の「立ち会い」が行われてきました。

4回生の時には春に「米軍資金」を日本の自然科学関係研究者が受け取って国際学会などに出席していたことが明らかとなり、当時の奥田東総長は「米軍資金を受け取って研究を行うことは好ましくない」と発表しました。この確認は現在でも生きています。ちなみに日本物理学会も1967年、「日本物理学会は今後内外を問わず、一切の軍隊からの援助その他一切の協力関係を持たない。」と決議し、長らくそれを学会発表の条件として明記してきました。

その年、初夏から夏にかけては「現職自衛官の大学院入学」に反対する運動が全学的に盛り上がりました。全学学生大会の決議に基づいて同学会によって全学ストライキが実行され、翌日の払曉にかけて徹夜の総長交渉が行われ、最終的に「現職自衛官の入学には種々の難点があるので各部局は慎重に検討するように」という部局長会議・評議会決定がなされました。この確認が生きていて約40年後の最近、ある部局で問題になり、「慎重に検討された」と聞きました。

かように私は多感な学生時代を過ごしました。「京大反戦自由の伝統」を継承するのにいささか寄与したかもしれません。しかし、このような行動は日本の好戦勢力の手を縛ろうとするものではあっても、日本が「満州事変」、第2次世界大戦でアジアの国々を侵略し、多大の犠牲をもたらしたことへの十分な反省の上に立って、償いきらずには「本物」とはいえないものでした。いわば「加害者」としての自覚が反戦勢力の間にも不十分なものであることが1980年代以降の「教科書問題」—「従軍慰安婦」で明らかになりました。

中国で残虐な行為を繰り返したことを率直に明るみに出さずには他国民から信頼され、憲法にある「名誉ある地位」は築けないものでした。

京大の時計台に向かって右側、最初の胸像は荒木寅三郎総長です。彼には光と陰がつきまといます。光というのは沢柳事件で京大の自治を確立した証として1915年、京大自らが選んだ最初の総長だったことです。しかし石井四郎731部隊隊長は彼の娘婿でした。これは陰に相当します。石井は京大出身の医学者を率いて中国で残酷な生体実験を行い、戦後は占領軍にそのデータを渡し「戦犯」訴追を免責されたといわれています。

いずれにしてもあまり戦争体験にふれることがなくなった現在の学生諸君が、かつての日本の体験を様々な手段でイメージして、想像豊かに「過ちを繰り返さない」ことに思いを馳せてもらいたいと思う次第です。

(ゆやま てつもり)

退任のことば

小川 侃 (国際文明学系)



本来の退職よりも一年も早く退任の言葉を書くはめになるとはまったく思いもよらなかった。私は平成3年の4月に当時の教養部と人間・環境学研究科に広島大学から着任した。広島の大島神社を紺碧の海のなかに眼下

に見る高台の家をのこして京都に着任した。それいらい実に17年が過ぎた事になる。おもえば長いようで短かった歳月である。しかし私の生涯のもっとも油ののった、充実した歳月であった。

広島大学とくらべてさすが京都大学の学生、大学院生は優秀で教えがいがあった。大学院生の場合には、博士論文のことで適当な論点を述べればただちにより論文をつくりだす——というかひねり出す事ができる学生が多かったのは嬉しかった。結局、人間・環境学研究科で主査として8人の博士論文を指導して博士(人間・環境学)をだした。地球環境学大学院では、主査として4人の博士を作る事になりそうである。彼等のうち日本の様々な大学(阪大、和歌山大学、帝京大学、別府大学などで京都大学はふくまれていない)で准教授として活躍している人々が、6人もいる。これは教師名利に尽きる事だと思っている。博士論文を私のもとに提出して私が「博士の父親(Dr. Vater)」になった人々の中で女性の博士が12人中4人になりそうである。

大学院の学生諸君には、演習でかなり厳しい言葉というか罵声に近い言葉をも吐いた事があるが、結局、これは学生諸君を鍛えるためだったと言う事を御理解頂いていると思う。このようにいって自らを慰めているのかも知れないが。

最後に心残りなのは地球環境の博士課程に二人の学生を残している事である。彼等を遠くからも指導し、また近くでも指導せねばならないとおもっている。

なお京都大学に赴任してよかったのは多くの欧米の哲学者、現象学者の客人をお迎えできた事であった。思い付くままに順不同であるが、名前をあげてみよう。Hermann Schmitz, Klaus Held, Arno Baruzzi, Ernst-Wolfgang Orth, Herbert Schnädelbach, Fritjof Rodi, Rodolphe Gasché, Weillhelm Schmid, Kah-Kyung Cho, Barry Smith, Françoise Dastur, Hans Werhahn, Guy van Kerckhoven, Gernot Böhme, Christoph Jamme, Gregor Paul, Karl Acham, Renato Cristin, John Sallis, Dean Komel, Rudolf Bernet, Manfred Sommerなどの著名教授である。他には今では教授になっている若い人々、Dr. Michael Grossheim, Dr. Fabian Heubelの名前も忘れることはできない。さらに将来の有為の研究者をアレクサンダー・フォン・フンボルト財団と学術振興会の共同プロジェクトなどで招いた、Dr. Guido Rappe, Dr. Peter Trawny, Dr. Harald Lemke, Dr. Anke Haarmannがいる。また国際交流基金などの奨学金で招いたのは、Nadja Wellhäusser(彼女はのちにハイデルベルクのWolfgang Schamoni教授のもとに明治の日本フェミニズムの研究についての博士論文を提出して哲学博士になり、今では龍谷大学の准教授である)やMaria Grajdianである。他に交換留学生としてLea Schaub, DAAD奨学生としてHolzapfel Namiko(波子)が小川研に留学した。彼(女)等はそれぞれの仕方で当時の小川研各位と交際して、なにもものか、貴重なものを此処京都から故国に持ち帰ったし、持ち帰るであろうと希望している。

最後の最後になおも一言言わせていただきたい。私は、小学以前から母親の血筋の関係で強度の近視なので(受験勉強のし過ぎに依るわけでもなければ、読書のしすぎによるのでもないのだが)人の顔を覚えるのが苦手である。したがって道や大学の廊下ですれ違って多くの先生方に不快な思いをさせたのでは無いかと懸念されるがここでお許しを頂きたいと思う。

(おがわ ただし)

退任のご挨拶

足立 幸男（国際文明学系）



この3月末日をもって京都大学を退職することとなりました。京都大学には1985年4月に教養部助教授として赴任しましたので、23年間の在籍ということになります。思い起こせば当時の教養部は教員にとってまさに

「天国」。京都大学の他の学部で教員をしている口の悪い先輩や同級生たちから「専門科目の講義の準備や院生の研究指導に時間をとられることもないし、就職口を見つけてやる責任もない、結構な身分だね」としばしば嫌味を言われはしましたが、たしかに、そんな嫌味を根拠のない「やっかみ」だと一蹴できないほどに恵まれた研究教育環境でした。教室によって多少の違いはあるでしょうが、私ども人文社会科学系教員の講義負担は、出身研究科での1コマ程度の兼任を別とすれば、一般教養科目2.5コマだけ。これで仕事ができないわけがありません。学生も優秀ですので、教授法で悩み工夫を凝らす必要もほとんどありません。そのためでしょうか、当時の教養部には、重厚長大な研究にチャレンジする碩学のスター教授が数多くおられました。専門学部よりも研究水準が高く、他研究科からの弟子入り志願者が後を絶たない教室も一つや二つではありませんでした。京都大学の、それも（大学内の他学部教員の「偏見」を別とすれば）玄人筋での評価が非常に高い教養部というファカルティーの一員になったことを、私がどんなに喜び名誉に感じたことか！ そのような私がほどなくして大学「改革」の渦中に身を置き、中抜き（独立）大学院＝人間・環境学研究科の設置→教養部解体・総合人間学部の発足→度重なる改組→総合人間学部による人間・環境学研究科の「吸収合併」→大学法人化という、一連の歴史的な大転換を、あるときは「改革」の旗振りとして、またあるときはシニカルな傍観者ないし批判者として、間近でつぶさに観察し体験する羽目になるうとは——もちろん、それはそれで大学人

としてある意味で非常に「幸運」なことであったとは思いますが——、まして定年を丸3年も残して京都大学を去ることになるうとは、赴任当初、予想だにしていませんでした。

経済合理性の観点からすれば、定年前の退職など愚の骨頂でしょう。定年で退職する場合とそうでない場合とでは、勤続年数が同じでも退職金の金額に天と地ほどの差がある——人材の流動化（セクター間・事業所間の人材移動）を妨げるこうした給与（退職金）体系や年金制度にこそ日本社会の閉鎖性の主要な原因があると私はかねてから主張してきたのですが——からです。それを百も承知で定年前退職を決意したのは、直接的には政策系大学院の設置に力を貸してほしいという懇請を断りきれなかったからです。実のところ数年前から研究室を「経営」することに疲労感を感じずようになっていました。自分自身の研究教育者としての競争力を高め、そのことを通して有為な研究者と高度職業人を社会に送り出すという、大学院教員としての当然の職責を果たしつつ（ブランド力が弱い、いやますます弱くなっている人環では、競合研究科所属の院生と同程度の研究業績ではポストにありつけなくなっているのです！）、しかも他研究科教員の倍以上のコマ数の講義をスマートにこなすだけの才覚や能力が自分にはないことを、数年前から折に触れて思い知らされるようになったのです。だからこそ、大学院での研究教育により多くの時間を割くことができるようにとの配慮から生まれたカテゴリー2の死守と、全学共通科目の負担増反対を訴えてきたのですが…。加えて、定年まで5年となった時点から、研究者志望の受験生には、政治学・公共政策学分野の研究教育環境が絶望的なほどに貧弱な人環ではなく他研究科への進学を勧めざるを得ない——さもないと彼らを路頭に迷わせることになってしまいます——という、窓際族の悲哀を味わうようになっていました。人環の「解党」的出直しを熱望しつつ京都大学を去る次第です。長い間お世話になりました。

（あだち ゆきお）

求めずして見つけたこと

ノイマン, ベルント (外国語教育支援室)



ドイツのヘッセン地方東部にある町シュリュヒターンからほど遠からぬ、ベルクヴィンケルと言われる地に、キンツィヒ川の流れる谷を遙か下に見下ろして、ブランデンシュタイン城 (Burg Brandenstein)

という古城が聳え立っています。この城が、後に私の人生で大きな意味を持つことになったのです。1970、80年代に古文書を求めて旅を重ねた私は、この地方にも足を踏み入れて、他の地でもいつもそうしていたように、時間の許す限り古い教会や修道院、古城などを訪れたものです。しかしブランデンシュタイン城の名はまったく聞いたこともありませんでした。

その状況が変わったのは、私が日本に来てからのことです。1988年に外国人教師として京都大学に赴任した後の1990年代の初め、同僚の石川光庸教授から、彼の友人である長崎の宮坂正英教授とともにシーボルトの遺稿の出版に携わらないか、と声をかけられたのです。原典批判版を出版するにあたり、19世紀のドイツ語とオランダ語の手稿を解読できる人物が必要なのだ、ということでした。恥ずかしながら、当時の私はシーボルトと聞いても（ほとんどの日本人とは違って多くのドイツ人がそうであるように）何のことかまったく分からず、あまりの無知さ加減におそらくあきれ果てていただろう同僚に対して、いったいそれは何者なのか、と尋ねざるをえませんでした。そこで生まれて初めて、ヴェルツブルク出身の著名な医者にして博物学者で、1823年から1829年まで長崎の人工の島出島で暮らし、ヨーロッパに戻ってから記念碑的著作によって日本を紹介して世界を驚かせたという人物、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの名を知ったのです。ご想像のように、出島についても私は何も知りませ

んでした。

シーボルトに対する興味を掻き立てられた私は、申し出を受けました。それからは何度も長崎に向いては出島やシーボルトの全遺稿のコピーを所蔵している鳴滝のシーボルト記念館を訪れ、彼の伝記や彼についての書物を読み、そして遺稿との取り組みを始めたのです。計画されていたのは、シーボルトがドイツを出発した1822年からオランダに戻る1830年までの間にシーボルトが書き、また受け取った書簡の出版でした。2001年から現在に至るまで、55の書簡がシーボルト記念館の『鳴滝紀要』に掲載され公刊されました。これらの書簡は、それまで知られていなかったシーボルト像を多々明らかにしてくれるものですが、医者あるいは博物学者というシーボルトの学問についてよりはむしろ、個人的な野心、上司や友人たちとのさまざまな問題、出島での生活などについての記述が多く、読むほどにシーボルトという一人の人間の姿がより鮮明に浮かび上がってくるのです。

さてブランデンシュタイン城に話を戻しますと、この城は現在なお居住されています。城館を除いては見学も可能で、たいへんロマンティックな庭園や木製器具博物館があるほか、シーボルト博物館もあります。というのも城主のコンスタンティン・フォン・ブランデンシュタイン-ツェッペリン伯爵がフィリップ・フランツ直系の子孫で、シーボルトの遺産がこの城に保管されているためです。ある日のこと、私はその城の見晴らしの良い小部屋に腰掛けて、遠く離れた日本のこと、シーボルトと長崎のことなどに思いをめぐらせていました。目の前には数多くの古い書簡が広げられています。それらをめくっていると、突然、ある感慨が湧き上がってきました。自分から求めたわけではないのに、なにか大切なことを見つけたことができたのだ、と。これまでの私の人生で幾度となくあったように。

(ノイマン, ベルント)

新任教員から

新任のご挨拶

永田 素彦（人間科学系）



2007年4月に、三重大学人文学部から人間・環境学研究科に准教授として赴任しました、永田素彦と申します。生まれは仙台、その後、進学や就職にあ

わせて京都、札幌、津と移り、現在は枚方で妻と娘一人と3人暮らしです。学部は文学部、大学院はここ人間・環境学研究科の出身で、3期生になります。前任校の同僚や学会の先生方からは、「新天地はどうですか」というお言葉と「古巣はどうですか」というお言葉を、半分くらいずついただいています。

専門は社会心理学です。学部時代の講義で興味を惹かれ、卒業研究がきっかけで大学院を目指すようになり、そのまま研究を楽しんだり苦しんだりしながら、社会心理学研究者の道を歩んでいます。これまで特に社会的コンフリクトと合意形成の問題に関心を持ってきました。学位論文では、まちづくりや災害復興をめぐる社会的コンフリクトについて、コンフリクト解析というゲーム理論を用いて分析するとともに、社会的コンフリクト発生の条件やプロセスを、質的な手法で明らかにする研究を行いました。現在取り組んでいる研究テーマは、自然環境をよりよく開発・保全するための住民と専門家のコミュニケーションシステムの開発、および、バイオテクノロジーの社会的普及のプロセスとその影響です。このように、具体

的な研究テーマは様々ですが、研究のスタンスは一貫していて、現実の具体的問題に対して、理論的な貢献ということにこだわりつつ、実践的なメッセージをアウトプットとして発信できるような研究をしていきたいと考えています。また、このような研究スタンスを支えるメタ理論としての社会構成主義にも、強い関心を持っています。

ここに来たからには、教育にも一層力を入れていきたいと思っています。優秀な学生さんたちを指導しつつ、お互いに成長できるような研究室環境を作りたいものです。今はまだ院生さんをもっていませんが、近い将来、自分の指導院生さんたちと、活発な研究室を作り、運営していくことを楽しみにしています。

最後になりましたが、昔からバイオリン演奏を趣味にしています。学歴よりも芸歴の方が長いくらいです。今は研究と趣味は結びついていないのですが、遠い将来、接点を作ろうと目論んでいます。

（ながた もとひこ）

転機

神崎 素樹（認知情報学系）



最低限の単位を要領よく取得し卒業できればいいや、という学生だった。そんな学生を受け入れてくれるゼミなど無く、たらい回しにあったが、アメリカ帰りの若い先生がそんな私を救ってくれた。研究に対して厳しい先生であった。それ以上に、研究教育に対する情熱はすさまじいものであった。卒論なんて学期末レポートに毛が生えた程度で良いだろうといういい加減な学生であった私もいつしか実験研究にのめり込んだ。そして、選択肢になかった大学院に進むことになった。生理学という極めて概念性の強い学問領域では、研究者のひとりとなりが出力に反映される。だからこそ、研究はそれに対する情熱が最も重要だと、先生は言葉にしなかったが私はそのように理解した。私を生理学に導いてくれた恩師との出会いは私の人生を左右し、成果主義であった私の性格までも変えた。京都大学に着任した今年、私が研究者を志したときの恩師の年齢でもある。恩師のように学生の人生を好転させるだけの影響力を持てるとはどうも思わないが、少なくとも生理学の面白さを伝えることができればと思っている。

子供の頃、大学で教鞭を執る自分の姿など想像もできなかった。正確には大学の教員にはなりたくなかった。物心ついた頃から、眼鏡を額の上にかけて、左手に煙草、右手には鉛筆を持つスタイルで数式とにらめっこしている父の姿をみてきた。

形になる出力もなければ直接世の中の役に立つ訳でもない大学の先生の存在意義、ひいては父の仕事を子供心にも疑問に感じていた。恩師と出会い研究者の道に足を踏み入れた今、啓蒙活動や本の執筆などの華やかさを嫌い、研究と学生をこよなく愛す父の気持ちがよく解った。今にして思えば、幼い頃から大学人としての父の背中を追っていたのかもしれない。私も父となり息子も物心つく年齢となった。彼は私の背中はどうのようにみていくのだろうか。

京都大学への赴任は私だけの転機だと思っていた。しかし、恩師との出会いや父の背中を思うと、私の存在と行動がまわりの人々の転機を促すきっかけになるかもしれない。

（こうぎき もとき）

Research overview

Mark Peterson (認知情報学系)



My research focuses on the field of computer assisted language learning (CALL).

This area of applied linguistics is concerned with the use of computer technology to assist learners in the process of second language acquisition.

In recent years, I have been exploring the potential of network-based communication systems in language education. In particular, I have examined the nature of learner communication in Internet virtual environments designed to support the study of English as a foreign language. My past research efforts have focused on investigating the potential of these tools in CALL. In my recent work I have attempted to achieve two main goals. I have explored the nature of learner interaction in network-based computer-mediated communication (CMC). To this end I have conducted a number of learner-based studies that have investigated communication strategy use in chat environments. I have also explored the potential of task-based learning in this form of interaction. These studies have produced encouraging results. My research has shown that task-based interaction in CMC may provide learners with an environment in which they can develop their communicative competence. In my future research, I intend to further explore

the nature of language learning in network-based CMC. At the present time I am conducting a research study on the influence on variables such as age, proficiency levels, task and sociocultural factors on learner-learner interaction in CMC. This preliminary study will form the basis of future large-scale projects involving students based in Japan and overseas. In conclusion, the focus of my future research work is the attempt to provide a principled basis for development in the field of network-based CALL.

(ピーターソン, マーク)

新任のご挨拶

中嶋 節子（文化環境学系）



昨年4月1日付けで共生文明学専攻、文化・環境論講座の准教授として赴任して参りました。学部区分では文化環境学系に所属します。専門分野は建築史・都市史で、近代の建築と都市空間を主な研究対象としています。建築と都市から「近代とは何か」という問いに答えることが上位の研究テーマです。

都市が辿った歴史の中で、近代はドラスティックに変化を遂げた時代でした。そしてそれは現在の都市空間へと多くの点で繋がっています。都市空間に関して「近代とは何か」を問うことは、「現在の都市とは何か」を問うことに等しいのです。そこに近代をフィールドとする楽しみがあります。

都市が辿った歴史の中で、近代はドラスティックに変化を遂げた時代でした。そしてそれは現在の都市空間へと多くの点で繋がっています。都市空間に関して「近代とは何か」を問うことは、「現在の都市とは何か」を問うことに等しいのです。そこに近代をフィールドとする楽しみがあります。

近代建築については現存するものしないものも含めて、実測や図面・文献調査を通して建築的特徴の分析と建築史上の位置付け、歴史的意義の考察を行っています。近年は工場や発電所といった産業化遺産、集合住宅の調査などを進めてきました。また、都市研究に関しては建築のみならず、土木構築物、自然環境といった空間を形作るあらゆる物質的要素に視点をおき、それらを出現させた文化的・社会的・技術的な因子・背景の関係性を解明することで、都市空間形成のメカニズムの個別性と自律性、そして普遍性を導くことを目指しています。

物理的形態、言い換えれば「モノ」を対象とし

た建築研究、都市研究は、実際に街を歩き回り、見て感じ取るという空間体験を経てはじめて深い理解が得られる性格のもので。京都は格好のフィールドです。京都への赴任を機に近代を探して街を徘徊したいと考えています。荷風の東京、漱石のロンドン、ベンヤミンのパリのように。

今後さまざまな場面でご一緒することになると思います。何卒よろしく願い申し上げます。

（なかじま せつこ）

史料解読と現地調査 — 中国史研究のおもしろさ

辻 正博 (国際文明学系)



2007年4月に、人間・環境学研究科歴史文化社会論講座(東アジア文化論)の准教授として着任いたしました。近江で生まれ育ち、大学と大学院を京都で

過ごした私は、就職後もこの地域を長く離れたことがありません。要するに余所のことをあまり知らない人間です。古い時代の歴史、それも中国のような懐の深い国を研究対象に選んだのは無謀だったかも知れませんが、「若気の至り」では済まされませんが、そういう人間が海外に留学すると、見聞きするもの全てが新鮮で忘れがたい経験になるようです。

院生時代(約20年前)に1年間、北京大学歴史学系のお世話になったことがあります。地の利(首都であること)を生かしてかなり真剣に(つまり頻繁に)各地を旅行して回ったことは、私にとって貴重な経験です。当時の中国は今から見れば「旧時代」に属しますが、それでも時折「経済至上主義」に出くわすことがありました。外国人の泊まれるホテルの無い、山西省のとある山中の町に行った帰りのこと、最終バス(午後3時半頃発)が突然の「キャンセル」。理由を尋ねてもはっきりしない。どうしてもふもとの都市まで帰らねばならない旨を伝えると、現地の物価から見て相当な金額を要求されました。仕方なく支払うと、お返しに切符の束が手渡されました。どうやら、これを売って元を取れということらしい。「にわ

か車掌」となったものの、結局、支払った額の半分ほどしか回収できず(しかし、バスを待っている客はいたのです!)、赤字ゆえの運休と悟った次第です。

普段の研究は、専ら文献史料を読み込む作業が中心ですが、現地の空気を吸うことはそれと同じくらいに重要です。史料解読から得たイメージを、実地調査によって肉付けする。そして帰国後に机上で再び史料と対峙し、解釈に修正を加える。膨大な文献史料と悠久の歴史をもつ中国をフィールドにしなければ味わい難い醍醐味だと思っています。

総合人間学部はおそらく、京大の中でも最も「自由に」動き回れるところでしょう。学生の皆さんと同様、私もこの環境を存分に活用して有意義な時を過ごしたいと思っています。

(つじ まさひろ)

宇宙で一番、宇宙初

木下 俊哉（自然科学系）



引越する度に居住国が変わるとい生活、大学院修了後から11年あまり続けていましたが、去年4月ようやく帰国し、人間・環境学研究科物質相関

論講座に就任しました。研究さえしていればよかった身分・生活から一変し、教育と研究グループの立ち上げに精を出す日々を送っています。

私が研究で扱っている系は、レーザーで冷却された原子気体です。室温では高速で飛び回っている原子をレーザーで減速（冷却）し、レーザーで思いのままに操る。宇宙で一番冷たい物体だとも言われています。私がこの研究を始めたのは、まだ海外にいた今から9年ほど前ですが、始めてみると大変面白く、「自分の残りの研究人生、ずっとこの分野に身を置こう」と決心するまで、そう時間は掛かりませんでした。

原子を扱いますが原子そのものを研究しているわけではありません。時間・空間スケールは全く異なるものの、物理的には等価である現象を、操作性と視覚化に優れた原子気体の中に発現させる。こうしたアプローチにより、これまでの系ではあまりに複雑すぎて詳しく解明できなかった現象を単純化し、その現象の奥底に潜む自然の原理の抽出を目指します。現在の物理は研究分野があまりにも細かく分化されていますが、私はこの細分化と反対の動き、固体物理の未解明問題から果ては宇宙現象に至るまで、異なる分野に跨るより普遍

性をもった法則・原理を、冷却原子を武器に追いかけたいと考えています。

物理法則の最も素晴らしい点は、それが世界共通どころか、「宇宙共通」であることです。そのような法則に結びつく現象を、世界初というより、宇宙で最初に観測したいと思っています。

（きのした としや）

新任のご挨拶

金丸 敏幸（認知情報学系）



昨年10月1日付け
で人間・環境学研究科
共生人間学専攻外国語
教育論講座に助教とし
て着任いたしました金
丸敏幸（かなまる と
しゆき）と申します。

なにぶん若輩ゆえ至らぬ点が多々あるとは思いますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

私がここ京都大学総合人間学部に入学したのは1996年4月、今からもう12年ほども前のことになります。当時はまだ一人の卒業生も出ておらず、総合人間学部がどうなるかは君たち次第だという言葉が、良い意味でのプレッシャーとなったのもよい思い出です。

学問的な話になりますが、私の専門は言語学で、特に人間の認知能力の観点から言語へアプローチを行う認知言語学の立場に立って研究を行ってきました。認知言語学は実際の生きた言語使用を通して言語の形式、意味、運用を捉え直す新しいパラダイムです。私はその中でも特に大量の言語使用データ、コーパスに関心を持っています。コーパスからコンピュータを使って、どのように形式的、意味的特徴を取り出すのか、また実際の言語使用がどのように言語使用者や言語に影響を与えているのかといったことを研究課題としています。

私が外国語教育論講座に着任する縁となったのも、コーパスを扱っていたことが大きく関係します。現在、外国語教育にはコンピュータの存在が無視できないものになってきており、コンピュ

タで言葉を扱う機会は今後ますます増えていくものと考えられています。このような状況の中、これまでコンピュータでコーパスを扱ってきた経験が少しでも外国語教育の役に立てばと思っております。

今後はもっともっと力をつけ、いろいろな形で貢献できるよう精進する心積もりです。ご指導、ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

（かなまる としゆき）

モラトリアムという経験

小原 丈明（文化環境学系）



2007年4月より助教を務めております小原丈明と申します。本学総合人間学部を卒業し、人間・環境学研究所の修士課程と博士後期課程を修了いたしました。ですから、現職に就いてから1年程しか経っておりませんが、10年以上もこのキャンパスで過ごしてきましたので、新任とはいえあまりフレッシュ感はありません。

まず、研究について簡単に触れますと、私の専攻は人文地理学であり、なかでも都市で展開される諸事象を考察対象とする都市地理学の立場から研究を行っております。具体的には、都市における開発がどのように展開され、またそれら開発にどのような意味があるのかという点について、空間的・社会的観点から明らかにすることを研究テーマとしております。このようなテーマは学際的な関心事項でありますので、都市地理学だけでなく様々な学問分野との関わりの中で研究を行うよう心掛けています。

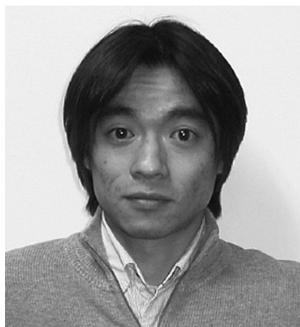
ところで、皆さんは総合人間学部に対してどのような印象をお持ちでしょうか。私はこれまでに、総人の学生にはモラトリアムの傾向があるという言葉を経験を幾度も耳にし、その度に言い得て妙だと感じてきました。このモラトリアムという「猶予」を表す言葉の背後には、時間的な浪費と、その後の飛躍への期待というマイナスとプラスの両義が込められていると思います。卒業後に総人で過ご

した時間を振り返る際、自分が経験したモラトリアムが前者の意味に過ぎなかったのか、あるいは後者の意味であったと感じるのかは、もちろん皆さん次第です。私自身はまだ前者の意味での経験としての印象でしかありません。今後、後者の意味としてのモラトリアムであったと振り返れるように、皆さんと共に努力していきたいと思っておりますので、何卒よろしく願いいたします。

（こはら たけあき）

自己紹介

川北 篤（自然科学系）



11月1日付けで人間・環境学研究科自然環境動態論講座の助教として着任いたしました川北篤（かわきた あつし）と申します。

昨年度まで本研究科の博士課程に在籍しており、学位取得後、大津市にある京大生態学研究センターで研究員をしておりましたが、再び慣れ親しんだ吉田南2号館に戻ってくる形となりました。何かと至らぬ点が多いかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

私の専門は生態学で、植物とその花粉を媒介する昆虫との間の送粉共生系について研究しています。学部時代には貴船や岩倉の山林に足繁く通い、ひたすら植物の名前を覚えることに明け暮れていましたが、そのころからなぜ植物はこれほどまでに多様なのかという疑問を常に持ち続けてきました。現在地球上には25万種ともいわれる被子植物が存在しますが、この華々しい適応放散が起こった背景には、花の進化と、送粉を担うさまざまな動物との間の共進化が深く関わってきたと考えられています。被子植物の多様化の歴史については古くからさまざまな研究がなされてきましたが、遺伝子レベルの情報が急速に用いられるようになったいま、こうした研究は新たな展開をむかえています。植物と送粉者の共進化がいかに被子植物の多様性を形作ってきたかについて、微力ではありますが少しずつ明らかにしていければと

思っています。現在、地球上の生物多様性は急激な勢いで失われつつありますが、生物多様性そのものの成り立ちをより深く理解することこそが、その保護を考える上でとても大切であると考えています。

今後さまざまな形でお世話になるかと思いますが、何卒ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

（かわきた あつし）

新任のご挨拶

福塚 友和（自然科学系）



昨年11月1日に助教として人間・環境学研究科相関環境学専攻（総合人間学部自然科学系）に着任しました福塚友和（ふくつかともかず、「塚」は濁音

ではなく清音です）と申します。前職は兵庫県立大学工学研究科で助手・助教として7年1ヶ月勤務してきました。もともとは工学部工業化学科卒業で博士後期課程を中退しての兵庫県での就職でしたので、7年ぶりに京都に戻ってきたことになります。出身は大阪で、大阪、京都、兵庫、京都と近畿を移動しています。

7年ぶりの京大は工学部移転もありすっかり様変わりしました。また、吉田キャンパスはほぼ10年ぶりで驚くほど変わっていました。古い建物が少なくなり残念な思いもありますが、より勉学に励みやすい環境になっており、現在の学生をうらやましく思うこともあります。着任前は出身大学とはいえ新しい環境への不安もありましたが、先生方が親切にしてくださることや、全学共通科目の実験で色々な学生と会う機会が多いことなどで、わりあい早くなじめそうだと思っています。

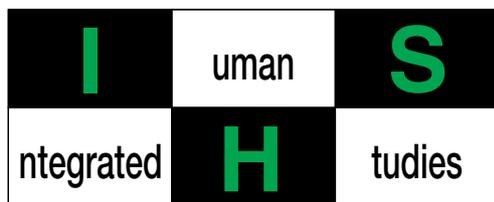
学生時代、前職と研究は主にリチウムイオン電池や燃料電池などのエネルギー変換デバイスに関して基礎的な面から取り組んできました。特に炭素材料を中心に研究してきました。着任した研究室は自然と人間の調和的共生を目指して電気化学デバイスの研究に精力的に取り組んでおり、今後

ますます研究を進めていきたいと思っています。

最近では理系離れが問題になっていますが、はじめから敬遠せずに自然科学系では何をやっているのかまず見ることで興味が湧くかもしれませんので、積極的に研究室の見学や訪問をしてもらえればと思います。

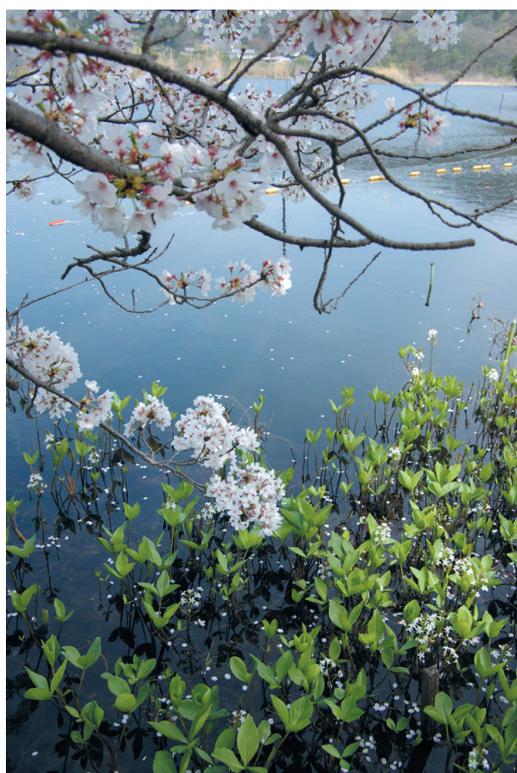
若輩者ですが、精一杯がんばっていきたくと思っていますのでよろしくお願い致します。

（ふくつか ともかず）



編集後記

今号は、2008年3月にご退任を迎えられる先生方に、原稿をお寄せいただきました。教養部が廃止されて総合人間学部となり、さらに改組を経て現在の総人・人環体制となる変遷を経験された先生も多く、吉田南キャンパスの有為転変を感じます。先生方のご貢献に改めて感謝の言葉を述べさせていただくとともに、今後のご健勝とご活躍を祈念いたします。後半では、新任の先生方に自己紹介と抱負を語っていただきました。「温故知新」。旧制三高以来の伝統である自由の気風を大切に、なおかつ懦弱に流れず新領域へのチャレンジ精神旺盛な総合人間学部でありたいと願ってやみません。 (N.O)



人間・環境学研究科
総合人間学部

広報委員会